

平成27年度 吹田市教育研究大会報告

平成27年11月11日発行 吹田市教育研究大会実行委員会事務局

平成27年度吹田市教育研究大会を8月26日(水)に実施しました。本大会は、市内全ての教職員が一堂に会し、教育委員のみなさまと顔を合わせ、吹田市の教育の方向性を共通理解する場として平成19年度に始まりました。以降、研究大会の形式は変更しながら本年度まで続いています。

今年度も「今 吹田から 未来(あす)の力を ～地域に根ざした質の高い公教育の創造～」をメインテーマとし、重点課題である「グローバル社会を生きぬくコミュニケーション力の育成」をサブテーマに据え、全員参加の講演会を昨年度に引き続き行いました。

以下に教育委員メッセージと講演会の要旨を紹介します。

〔教育委員メッセージ〕

谷口委員長

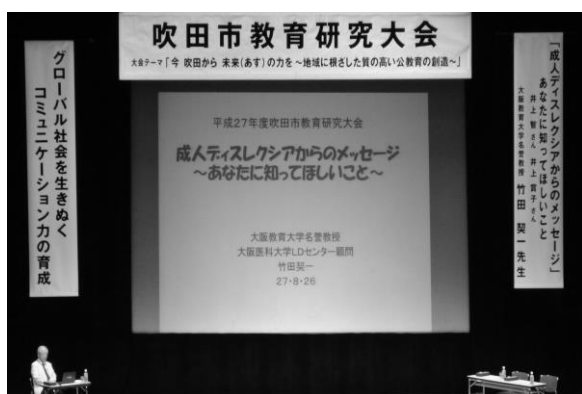
昨今「アクティブラーニング」という言葉をよく耳にします。自ら考えて行動する力、そしてお互いの意見を聞き合いながらよりよい課題の解決法を見つけていく力をつけていくことで、吹田の子どもたちの学校での学びは、より深まっていくことでしょう。「学び合い」の根幹には子どもたちが安心して自分の意見を言い合い、発表することができる、信頼関係のある学習環境が必要です。吹田市で推進している幼・小・中一貫教育を生かし、是非 家庭・学校・地域がしっかりとつながって子どもたちを育てていく環境を築いてください。教職員のみなさんが各学校・園での教育実践を共有し、さらに高め、「学び合う」ことのできる子どもたちを育てることは、吹田市の大きな「未来(あす)の力」になります。これからの教育活動をさらに充実したものにさせていただけることを期待しております。

宮下委員長職務代理者

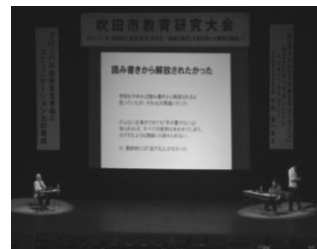
最近では、現場の先生方がとても忙しくて授業の準備を十分にできなかったり、子どもと向き合う時間が少なかったりというような話を耳にします。教育委員会でも何とか先生方の負担を減らし、本来の先生の仕事に没頭していただけるように、何かいい方法はないかなと考えているところです。我々も現場の先生と一緒に子どもたちのためにがんばっていきます。

大谷委員

「子どもが安全で安心して暮らし、学べる」そういった吹田になるよう、私も吹田の教育に携わるものの1人として努力してまいりたいと思っております。また梶谷教育長をはじめ、谷口教育委員長や他の教育委員のみなさんと「チーム吹田」として一丸となって、今日ここにいらっしゃる教育現場でがんばってくださいる教職員のみなさんを支援できたらなと思っております。本日の学びが吹田の子どもたちにつながり、子どもたちが元気な姿になるよう共にごがんばっていきましょう。



〔竹田契一先生・井上 智さん・賞子さん 講演会要旨〕



文部科学省の調査によると、通常学級に在籍する子どもの中で、発達に何らかの問題がある子どもの割合は**6.5%**とされています。その中で**4.5%**が読み書きの課題を抱えた子どもです。発達障がいとは育て方の問題ではなく、「読む」「書く」「話す」「聞く」などに関わる脳の場所で伝達があまく連携を取れていないことで起こる脳の機能の問題です。ディスレクシアは、**学習障がい**の一種で、**知的能力や一般的な理解能力などには課題がないにもかかわらず、文字の読み書き学習に著しい困難を抱える障がい**です。

井上智さんも小学生の頃、授業での先生の話はよく理解し、発問に対してもしっかりと考えて答えることができるのに、「読もうとするとうまく読めない」「書こうとしてもなかなか書けない」ために、先生から「怠けている」と捉えられ苦しんでいました。「**40数年前の話ですが、現在もなお、こういった状況が学校で起きています。**」と竹田先生は警鐘を鳴らされます。

「頭の中に思い、考え、描いていることはたくさんある。話もできる。しかし、読み書きという形での表現ができなかった。」「社会に出ても読み書きの場面は幾多とある。読み書きができないことを隠しながら生きてきた。」と智さんは半生を振り返ります。どんなにつらくても学校に行き、反抗的な態度をとりながらも授業を必死に聞き続けた智さんの「勉強したかった」という言葉には、胸に突き刺さるものがありました。自身がディスレクシアであることを知り、長い時間をかけてICTなどを活用した自分なりの「読む」「書く」方法を手に入れた智さんは、大工として仕事をされながら妻の賞子さんとともに「自分と同じ思いをする子ども」を出さないために、とディスレクシアのことを知ってもらうこと、そしてICTを活用した教材の研究などにも取り組んでおられます。また、講演の中では触れられませんでした。智さんは大阪芸大短大の特修生制度を知り、今春から入学できるよう、単位取得に挑戦されました。パソコン利用や別室受験を認められ、7月には人生で初めて基礎情報学の論述試験に臨まれ、音声読み上げソフトを使って推敲を重ね、見事な成績で単位を取得されました。「大学に行くことはあきらめていたが、スタートラインに立てた」と智さんは今後学生として勉強できることを楽しみにされています。

来年の平成28年4月からは障がい者差別解消法が施行されますが、その中でキーワードとなる「合理的配慮」について、講演の中では「他の子どもたちと同じスタートラインに立つために既にある環境や条件に対して、子どもの特性に合わせた変化をつけること」とお話しいただきました。「教師の気付きや一言、支援や特性理解によってその子の人生が大きく変わる機会がある」というお話の中、竹田先生は、「これまでの特別支援教育の積み重ねから、吹田には子どもたちを適切に支援していく機能が十分あるはずだから、通常学級の中で一人ひとりのつまずきを理解して、しっかりと対応していくことがこれからの課題である。」と講演を締めくくられました。

〔梶谷教育長 閉会あいさつ〕

今日の講演をクラスの子どもたちと重ね合わせて聞いておられた方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。先生の気づきが非常に大事であり、「子どもたちがどこでつまずいているのか」、「つまずきの背景をしっかりと捉えながら、そしてそれをどのように解決していくのか」、「きちんと考えていく、そうしたことが、第2の井上さんを出さない」ということにつながるんだというお話がありました。今日のお話をしっかりと受け止めながら、明日の吹田市の教育実践の中に是非つなげていきましょう。

〔研究大会について〕

1.教育研究大会参加者 **1394名**

内訳

	幼稚園	小学校	中学校	合計
人数	52人	916人	426人	1394人

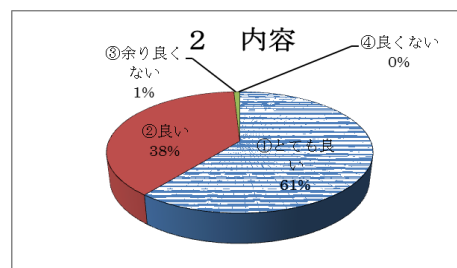
2.アンケートについて

■ 回収数 **945通**

(回収率 67.8%)

■ 設問「教育研究大会の内容について」

項目	人数
とてもよかった	566人
よかった	359人
あまりよくなかった	8人
よくなかった	0人
無答	6人



—参加者の声から—

○教育委員さんの生の声を聞く機会があって良かった。

○子どもたちのつまずきに敏感に気付き、そしてその子どもに応じた指導・やり方を見極めていかなければいけないと改めて強く感じました。様々な視点から子どもたちを見つめ、指導に生かしていきたいです。

○いろんな特性の子どもたちを見ているという責任を強く感じました。一人ひとりをしっかり見ることの難しさ、大切さを感じるとともにもっと勉強しないといけないと思いました。

○子どもは、認められ、希望に満ちたものでないといけないと思います。その頃に考えられない絶望を味わってしまった井上さんが現在まで生きてたくさん努力されてきたことに胸がいっぱいになりました。

○井上さんが「困っていた自分」を語ってくださったことで、現場で役立つことができました。まず、つまずいた子を見つけ、寄り添う教育をしたいと感じました。指導法について、勉強していきたいです。